# 風景体験の楽しみとレッスン

佐々木 葉

フェロー会員 早稲田大学教授 創造理工学部社会環境工学科(〒169-8555 東京都新宿区大久保 3-4-1)
E-mail: yoh@waseda.jp

景観づくりの議論では，環境を客体化し，そのあるべき姿を客観的に明らかにして，それに向かって対象を操作する，という思考がある．本稿ではそうした呪縛を解体し，私の風景体験を現象学的に捉え，他者とともに生きる世界の生成の契機となる風景体験に向かっていくための力の必要性を説く．あわせてその力を育むレッスンの場の実践の試みを報告する．

***Key Words:*** *風景体験, 現象学, 環世界, アクションリサーチ, 郡上八幡*

## 1. はじめに

本稿では 3 つの話題を提供する．一つ目が「いま・ここ性」を切り口にした風景体験とはなにか，二つ目がその風景体験は私の思い込みにすぎないのではないか，他者と共有できるのかについて．これらを主に現象学を頼りにしながら考える．ついでこう考えた理由を示しながら，風景体験を育む場の実践を最後に報告する．いずれもこれまで断片的に考え，この場で発表してきたことどもに関連しつつ [1)-4)]，難解ではあるが光を与えてくれる著作を片手に，私にとって風景とは何か，なぜ大切なのか，という問いを見つめる．あわせてそれに実践として取り組む．こうした広義の研究活動の 2023 年の夏時点での報告である．なお今回頼りにした大きな知は，西研「哲学は対話する」[5)]と國分功一郎「暇と退屈の倫理学」[6)]であり，実践の場は郡上八幡の saoco lab.[1)]である．

## 2. 風景体験とはなにか

### (1) 風景の「いま・ここ性」

研究室の卒論ゼミの一場面で，学生がインスタに上がっているお茶の水の写真にはどれも中央線と丸の内線が写っている，と指摘した．確かに．日々何度も繰り返されるとはいえ，二種類の列車が一つ視野に収まる瞬間は，いま！だ．切り取られた写真に，いまという時刻，時点の同定が託される．もちろん視点を選びフレーミングをチェックしながら，ここだ！という場所を決めることで構図が決まるのだから，眺めにはユークリッド空間上の視点の同定が託される．つまり体験する風景には，いま，ここに，自分はいる，という保証が期待されている．このことを風景の「いま・ここ性」と呼んでおこう．目の前の眺めをありありと感じている自分の感覚，生きているという感覚を風景体験が与えてくれる一つの理由は，こうした風景の「いま・ここ性」にある．SNS のチェックイン機能をみても，私たちは，今ここにいますということを他者に伝えることで，自分の存在確認をしたがる．それは，どこにでも行けるという移動の自由とどこに行ってもそれがどこなのかわかりづらいという世界のフラット化の中での，積極的な自己定位確認欲求の行為ともいえよう．

とはいえ，風景体験の「いま・ここ性」は現代に限らず，風景の誕生とともにある．違い，変化があるとすれば，その解像度だ．八景式というスタイルとして共有されてきた風景体験は，場所と時刻や気象，季節，動く要素に意識が向けられ，名所図会でも場所に加えて出来事が時間を特定している．ただ，それは大まかにこの辺からあっち方向をながめ，大体時間的にはこの頃，というおおらかなものだ．私たちが撮影した写真に秒単位で時刻が刻まれ，撮影位置を示すピンが鋭く一点を指すのとは，随分と違う．

### (2) 風景体験による私の定位

さて，風景体験にはありありとした感覚が伴う，と述べた．これは眺めの対象となる山や建物が客観的に事実として存在していてそうした本物を見ているから，では

ない．眺めているという私の感覚がありありとしている，ということである．ここからは，西の説く現象学を参照する．哲学には，本質や真理という絶対的に正しいものがあってそれを追求するという考え方と，そんなものは存在せずさまざまな見方や考え方があるという相対主義とがあり，20 世紀に両者は対立するが，そのどちらでもない現象学を現在の社会課題に取り組む方法となる哲学として，西は深くこれを考え，展開する．非常に多くの著作がある中，分断が極まった現代においてお互いが納得しうる共通了解を作り出す極めて能動的な営みについて説いた「哲学は対話する」[5]から学ぶ．西が立つのはフッサールの現象学であり，私がこう感じ，こう意識しているという主観の体験の場に即し，それを深く見つめる（反省する）ことからすべて（それがどのようなものなのか，とか，どのように共有できるのかとか）を考える（現象学的還元）のが，現象学である．考える先には，私はどんな世界でどう生きている，生きようとするのか，という問いと，それへの他者との共通了解の探索（本質観取）ができるという確信がある．

さて，本稿では眺めるという風景体験について考えようとしているのだった．現象学に学べば，その体験にありありとした感覚があれば，そこからさまざまなことを考えていける．一方西は，体験によって得る知覚が現実で，幻ではないという安心をえられるには，それがありありしているだけなく，その知覚を時間的空間的秩序の中に位置づけることができるかどうかが大切，という(p.356)．たとえある風景を体験していても，それが私なりにとらえた世界のなかで定位されず，唐突に私はいまここにいる，みたい，というような体験は，どこか不安だ．まさに私がどんな世界にいるのか，それを見渡すためにもその世界の中で私はどこにいるのかの定位が必要である．風景体験の「いま・ここ性」は，その世界の中での定位の指標となる．

### ⑶「いま・ここ性」の解像度

こうした理解の上で風景の「いま・ここ性」の解像度について考えてみる．八景式や名所図会のようなおおらかな「いま・ここ性」は，必然的におおらかな時空間の範囲の秩序のなかで同定される．これに対して微細な違いを吟味した上でSNSに投稿される写真に代替されるような風景体験は，かなりズームインした時空間の中でのことと言えまいか．よってそれを同定する時空間も狭い，と．もちろん決定的瞬間を絶妙なアングルで切り取った写真が，広く，多様な世界の表象となることは報道写真や映画のワンシーンに認められる．あるいはアポロから撮影された闇に浮かぶ青い地球の眺めが，世界観を変える人類の風景体験として人々に共有された [7]．高解像度の「いま・ここ」が新しく，広い世界を逆照射するのだ．しかしこれは，私が今ありありと体験をしている風景から，私はどんな世界でどう生きている，生きようとするのかを考えていくための土台になる風景体験とは，少し違う気がする．

自身の体験にありありとした感覚がともない，その体験と自身が向き合っていくには，たとえそれが高解像度のいま，ここであっても，その眺めとしばし向き合う，風景として立ち現れてくるのを，しばし待つ，耐える，あるいは繰り返し向き合う意思が大切な気がする．そうした「風景に浸る」と呼びうるような体験からは，幅のあるいま，その間の視線や身体の揺らぎによって印象派，ときにキュビスムの絵画のような重層的で多次元なここ，そういった「いま・ここ性」が感じられる．触覚的な知覚とも言える．こうした体験からは，高解像度の「いま・ここ性」が有する感度の高い差異，時に比較優位性の競争という文脈におかれた差異を超えた「いつも・ここ」という安心感，関係性が生まれ，同時にそれが，ふと，自らの心が向かうありありとした新鮮な風景として何度も再生される．少なくとも私自身の風景体験は，そんなふうなのである．

### ⑷提供される風景と体験の仕方

さて，ここまでは風景を体験する側から考えてきたが，「いま・ここ性」を提供する風景のデザインについても考えておこう．その起源を知らないが，いまやそこかしこにある地名を彫刻のように造形したものと一緒に撮影するためにポーズを取るという風景体験は，視点近傍のデザインによってここを強調し，そこに私が来たことのエヴィデンスを提供する．さらにはリゾートホテルから眺められるための棚田を作った例もあった．一目でこことわかり，そこに行ったといういつを刻む風景体験は，体験者に満足を与える．絶景として差別化も可能だ．

十把一絡げにするのは乱暴ではあるが，体験者の満足を意図して提供された風景は，消費される危険がある．國分功一郎が，「暇と退屈の倫理学」[6]において注目する概念の一つである贅沢とは別物として提示する消費である(p.170)．「いま・ここ性」をわかりやすく盛り込んだ風景体験によって自己定位とその承認欲求への満足は得られるものの，次の別の風景体験による満足が欲しくなり，絶えることがない消費ゲームとなりかねない．あなたの「いま・ここ性」をさりげなく，洗練した形で提供するサービスは，とどまるところをしらない．

しかしここでは，安直な地名彫刻は消費される風景体験を，地域の伝統を尊重した体験はそうではない，というように，眺めの対象の違いに注目はしない．あくまで眺める私が，どう眺めるかで，風景体験が消費されるのか，あるいは，そこに世界を確かめ贅沢な生をいきる自身を実感させる体験となるのか，それが決まってくる，

と考える．たとえわかりやすく差し出された「いま・ここ」を付与された眺めであっても，そこに浸り，その「いま・ここ」を私の関心から時空間のなかに位置付けて，秩序ある世界を確かめるような体験を志向することもできるからである．そしてその逆もある．つまり，風景体験が消費されるかどうかは，風景デザインの影響をうけるものの，やはり，体験する私にかかっている．そういう気がする．

以上，一つ目の話題のまとめとしては，風景体験をつくるのは視対象ではなく体験する私だ，ということである．

## 3. 私の風景体験は大丈夫か

### ⑴ 世界はどう見えているのか

風景体験をつくるのは視対象でなく私，と述べた．乱暴な言い方である．景観とは人をとりまく環境の眺め，という恩師の定義における環境を否定するかのようだ．しかしここで注目したいのは，客体となる環境があって，それを主体である私が眺めている，という操作論的景観論によって土木が責任をもつべき視対象をなんとかしようという動機のもとで構築された景観把握モデルの世界ではない．一切を私の体験から考える現象学を参照して，風景体験というものへの私なりの理解をしようという試みである．そのため，視対象という客観的世界があってそれを私が眺めている，という考え方をしない．西に学べば，超越論的還元という方法に沿うことになる．そこにいく前に，異なった文脈からではあるが國分が論じている環世界の概念から，私の眺める世界，それをつくる風景体験について考えてみる．

### ⑵ 環世界間移動能力と風景体験

國分は前掲書の第 6 章暇と退屈の人間学―トカゲの世界をのぞくことは可能か？―において，ユクスキュル[8]の環世界をもとに，私が見ている世界はどう獲得され，また創造されるか，そのなかでの人間を多重的に論じている．この部分を，私はかなり直接的に風景論として読んだ[注1]．國分の論を解釈してみよう[注2]．トカゲ，ダニ，そして人間も，自らが動物的に生きる世界として環境を眺めている時には，それぞれの生存に必要な情報だけをシグナルとして受け取っている．頭の中で抽象的に描かれる世界である環境は虚構であり，それぞれの生物はそれぞれの環世界を生きており，それはそれぞれ全く異なるものである(p.302)．人間も日常生活において自分なりの安定した環世界を獲得し，そこで生き延びていくのだが，動物と違って，異なる環世界間を移動する能力が極めて高い(p.331)．一つの環世界にいるときにはそれを構成するシグナルを享受し，それにとらわれている．しかしその世界に不法侵入してきた何かを認めると，新たなそれを意識し，それについて考え，やがてそれを新たなシグナルとした次の環世界へ移動，創造していく．この不法侵入してきた何かを認め，それに向き合うことこそ，風景体験と呼びえるのではないだろうか．

最寄駅まで歩いていく時には，ほぼ自動的にあの角をまがってあのコンビニで水を買って，あの駐車場を横切ってちょっと近道して，というように空間の情報をシグナルとしてうけとめ，行動する．家から駅あたりの環世界を生きているとき，そこで得る眺めを風景体験としてありありと感じ，反省の対象とすることはしない．しかしある日突然一件の家がとりこわされて更地になっているのに気付き，これはなんだったのかと，当惑する．あるいは，ビルの向こうに大きく輝く満月を見つけ，その瞬間さっきまでとは別モードのいま・ここに投げ入れられた気がする．人は日常的に環世界を再創造していると國分はいう(p.405)．不法侵入してくるのは大きな視覚的変化や絶景のような強い刺激ばかりではなく，日常のなかでふと目をとめ，それに心が留まり，風景として体験することで，私の生きる環世界は都度創造され，それを楽しむことができる．そのために國分は楽しむ能力を得ること，そのための準備や訓練が必要という(p.396)．

私はキャンパスに着き，研究室のある高層棟に入る手前で，58 号館の屋上にある給水タンクに視線をなげ，そのステンレスのピカピカとした感触を認めながら，もう何年も前に失われてしまった鉄製で立面に応力に対応した幅の変化があるリブが並んだ初代の給水タンクを思い浮かべ，それが好きだったこと，失われてしまったこと，その自身の気持ちを毎回確かめる．その視線を投げるという行為が付帯的にその背後に立ち上がるビルのシルエットに流れ，それが伝えるキャンパスの外の開発のことや，それに伴って生じた街の人の流れなの変化などをその都度さまざまに思い，このキャンパスに通い続けている 20 年の月日，そのなかで何をしてきただろうか，といった思いを引き寄せてくる．キャンパスという環世界はその度に，自動化された眺めの殻を破って風景体験の場になる．屋上の給水塔の喪失という出来事をきっかけとした，眺めへの志向の日常トレーニングである．これによって次の変化を待ち構えている．もちろん無意識のうちに．

### ⑶ 他者との共有

以上，かなり強引ではあるが，私が体験している環世界について，その頻繁な創造というダイナミックな生成の契機として風景体験を位置付けてみた．しかし，そもそも環世界は私だけのものなのか．トカゲの環世界を共有できなくてもまあ諦められるが，人の，親しい人の環

世界とも隔絶しているとすれば，バブルのなかでひとり生きるような孤独感，不安感に苛まれる．他者の環世界を覗き，私のそれとの共通点を確かめることはできないのか．西の説く超越論的還元は，全ては私の体験，意識において世界は存在するとした上で，大丈夫，その世界は他者と共有できる，と言ってくれる．前掲書第 12 章において，フッサールの超越論的還元を補完，展開しながら現象学の方法として丁寧に論じる．その前の章で，他者の体験の共有は，他者が語った体験を通して行われるのではなく，あくまで私が直観する明証によると釘を刺した上で．

西の論から本稿の目的に沿ってまとめてみよう．私以外に私と同じような人である他我がいると認識することで，世界は間主観的に構成されていると了解でき，他我と世界が共有できることとなる(p.340)．つまり，私が体験している世界には人がいて，その人のふるまいをみていると私のそれと同じようだから，きっとその人と同じ世界を生きていると思える．であれば，私も多くの他我の中の一人なんだな，という私の感覚としての間主観性が獲得できる．この間主観性によって，私は，私がこう感じているという主体としての私と，その中にいる他者たちのなかの一人の私という二重性をもつことになる．それによって私の世界は，他者のふるまいや言葉を私がうけとめるにことよって，「私も他者たちもともに生きている一つの世界が存在し，それはこのようになっている」と，その都度安心できる(p.342)．

こうした世界の共有感覚を与えてくれるのは，眺めの中に人がいて，その人のふるまいを認め，それについて思いを巡らす，という風景体験を通じてなのではないだろうか．他我を認める日常的な場面，さまざまなふるまい，あるいはふるまいの痕跡に対する多角的な想像を直観できる場面，これらの風景体験の蓄積によって，私の間主観性は確かなものとなり，大丈夫，私は他者と共通世界を生きていると信じることができるようになる．そんなふうに私は解釈した．そのためには，私が，眺めの中に人を認め，その人に心の中で働きかけなければならない．このときの人とは，擬人化された要素，家や樹木や山をも含む．風景論における仮想行動は，この文脈においたとき，より重要な意味を帯びる．

以上二つ目の話題のまとめとしては，私の風景体験によって，私が生きる世界を楽しみ，他者とつながるためには，私がそうするという力をつけなければならない，ということだ．

## 4. 風景体験のレッスン場

### ⑴ 客観性と操作の呪縛からの解放

二つの話題によって風景体験とはどのようなことなのか，を考えてきた．それも徹底して体験する私という視点から．その理由は大きく二つある．その一つが，風景や景観の議論において，多くの人，学生が，無条件に，客観性を重視し，環境を操作すればよい景観になる，と考えている，その呪縛から解放したいからだ．主客二元論は楽だ．主体と独立した環境があり，さらにそこには正しい形がどこかにあり，それを見つけ出して，そうなるように操作すれば，世界はうまくいく．そんな美味しい話はない．美味しいどころか，それはとても恐ろしい．主観を排除して客観的なエヴィデンスにもとづいた発言，決定をするべきだという正論のもとで，実は相当に恣意的で偏った客観が押し付けられる．その危うさに反応する体の感覚を鍛えなければならない．一方，ダイバーシティの名の下に，それぞれ違っていい，個性重視の名の下に，みんなちがってみんないい，という思考停止がある．みんな違うのは当たり前だ．そこから何をするかなのだ．社会は違いを抑圧することは確かだから，違いをみとめ，尊重し，公正を実現することは大切である．しかも，生きる世界がとても交わりそうもない隣人の群れとなった状況の中で．その方法は，みんなちがってみんないい，という思考停止ではない．西も國分も，哲学という学問によって，どこかに客観的にある正しい姿という呪縛を解き放ち，一言でいえば生きづらさを抱える人を救おうとしている．その強い使命感と，そのための学問の探究の深さにおののくばかりである．そしていずれも，私という存在を信頼し尽くすことから築き上げる知の探究であり，参照した 2 冊の十分な理解には至らなくとも，大切だと直覚する．

### ⑵ 風景体験による幸福

二つ目の理由は，私自身が風景を体験することで幸せに生きてこられたからである．苦労や生きづらさと無縁な人生は，風景のおかげかもしれない，と最近思うようになった．日に何度も風景のアウラに触れる．しかしどうも，これは誰もが体験しているわけではないらしい．美しい風景を眺めるとか，いい写真を撮るとか，なるほどという俳句をひねるとか，そういう技術はなくとも，体験している私が，あぁいいなぁ，と，いま・ここをありありと味わう．風景以外にも音楽や推しにその体験が向かう人もいるであろう．しかし，身近にできる風景体験によって世界と私がその都度生成される実感は，幸福で贅沢な生を支える．客観的な美しい環境に幸福の責任を負わせるのではなく，体験する私によってひきよせられる幸福．私の場合はいつのまにか，そうなっていたのだが，先の二つの話題から，風景体験が日常的にできるためには，なんらかの力，訓練が必要とされることがわかった．

### ⑶郡上八幡の saoco lab. の軒下

昨年の景観・デザイン研究発表会では，縁に導かれて始まった郡上八幡のサテライト研究室，saoco lab.について報告した [1]．中心部をつらぬくメインストリートの縁に位置し，かつては郡上竿の工房だった典型的な町屋を一軒お借りして，私や学生が不定期に滞在する．1 年 5 ヶ月が経ち，昨年時点で体験したまちの人たちとの交流，存在の認知が一定の落ち着きをみせながら，郡上八幡という四半世紀つきあってきたまちにいることの贅沢を実感しはじめた．わけても，引き戸の玄関をあけ，軒下に椅子をだして，水路の音を聞きながら，そこを使う，そこにいることの面白さは，自ずと始めたふるまいだったのだが，徐々にその意味の深さを考えるようになった．具体例をあげよう．

積極的な試みとして，お月見を行った．saoco lab.から正面にみえる平山の頂上から満月が昇ることに気づいた．そのため 9 月の中秋の満月の日に，軒下にテーブルと椅子を出し，ススキを活け，ちょっとした飲食の準備をして，ご近所や友人が集った．当然のことながら楽しい．と同時に，その様子が暗い通りをゆく人々の目に新しい眺めを提供していることに気づいた．こちらからは顔が見えない通りすがりのひとに，「お月様きれいですよー」と声をかけることも自ずと生まれた．集い楽しむ様子を通りに染み出させる，というアクション．

ついで日常的なふるまいとして，朝，軒下でコーヒーを飲みながら本を読むことを，自ずと始めた．水音が心地よいし，朝 8 時前は車の通行も少ないからだ．すると通勤する知人と，おはようございます，と挨拶する．週に一度誘い合って喫茶店にいく近所の老婦人グループを発見し，2，3 度目からは言葉を交わす．行き交う車の種類が時刻と共に変化していくのに気づく．軒下にいる私の前に，気づかなかった風景が立ち現れ，その体験が私にとって八幡というまちを新たな世界へと更新する．そして多分，言葉も目線も交わさないまま通りをいく人たちが，軒下にいる私をチラ見し，ん？と一瞬思っている．その人たちにとって，環世界にわずかな不法侵入が起きている．軒下のふるまいという点景を作り出す，というアクション．

もう一つ，思わぬこと．滞在の予定などは外壁に設えた黒板に書き込む．年末年始を saoco lab.で過ごしたので，その黒板の脇にペットボトルをぶら下げて南天と花を飾った．滞在を終える日にも南天はまだ生きていたのでそのままにして，近所のお友達に，枯れて汚くなったら捨てて下さい，とお願いした．次に来るとそのペットボトルには草花が投げ込んである．友人は通りすがりに saoco lab.の花入の世話をしてくれていたのだ．以降ずっと．第三者が介入できるきっかけとそのための仕掛けを作り出す，というアクション．

これらの決して計画的ではない出来事から，saoco lab.の軒下という中間領域になんらかのふるまいを挿入することで，私の世界が楽しくなると同時に，まちに暮らす他我にも新しい風景体験がうまれているのではないか，と考えた．

一方，こうした軒下の風景は新しいのか．町屋が連なる郡上八幡において，ほんの 3,40 年ほど前までは，ファサードが全面引き戸で開放的な家が多く，商売や工房として働く場でもあった．通り土間はときに子どもたちが通り抜けるストリートであった．こうした空間の特質によって，建物内部でのふるまいは常に他者の目に現れ，共有されていた．その後，一軒一軒と商売をたたんで仕舞屋へ改修されていくと，開口部が減って通りから内部の様子がうかがえない形へと変質した．しかし，かつてのふるまいが身についているまちの人たちにとって，この物理的変化はさほど影響を与えていないのではないかと思われる．内部が伺いしれない家でも，ピンポンなど押さずに玄関戸をガラリとあけて，「おらんかねー」と一声かけて，返事がなければ回覧板でもお裾分けの品でもそのまま上り框に置いておく．玄関戸に鍵がかかっていない家もまだ多い．彼ら彼女らにとって中間領域は相変わらず他者に開放されているのである．

しかし，物理的にはファサードは閉じている．saoco lab.を訪れた学生にとって，あるいは近年暮らし始めた人たちにとって，内部は未知の世界である．それが開かれ，つながりをもった世界として体験されるためには，風景体験をつくりだす私の努力が必要である．

### ⑷風景体験のレッスン

そこで saoco lab.の軒下にできるだけ誰かがいて，何かをしている状態をつくることを始めた．まず学生にとっては，都会の日常では経験することのない，まちに自身を現す体験となるであろう．それは，まちの人たちが声をかけてくれて嬉しい，という単純な満足を超えて，軒下に浸ることで現れてくる風景体験を味わうトレーニングなのである．「軒下活用中」という札をぶら下げることで，こういうことしていいんだ，という位置付けを学生には与える必要がある．私のように自ずとやってしまう力がない学生も多いためである．

一方まちの人たちには，都会の変わり者が始めたふるまいという不法侵入から，次の環世界へと移動していくこと，それは案外楽しいな，と思ってもらうことを期待している．透過性の高い中間領域を生きてきた人たちには，なつかしいかもしれない．外の物音と熱の遮断とあわせて他我の眼差しも退ける暮らしを維持しつつも，新たなまちへの現れの体験の楽しさを初めて実感するかもしれない．月が出た時だけ，朝だけ，ささやかなペットボトルの花だけ．あるいは saoco lab.だけ．こうした限定

的な時と場所であっても，他我がいる風景を体験しようと思えば体験できる機会があるまちに暮らすことは，風景体験のリテラシーを高める．

さて，ここで本稿の第一の話題のまとめに立ち返りたい．風景体験をつくるのは視対象ではなく体験する私だ，と述べた．極論として，どのような視対象，空間であっても，体験する私に力があれば，反省の対象となる風景体験が可能であるとの立場である．しかし，それはやはり極論であって，消費対象とならず贅沢に楽しさを味わえる風景体験がうまれる場は，それなりの質を有していなければならない．その点で saoco lab.はロケーション，空間ともに素晴らしい．やはりレッスンの場は吟味して選び，ふるまいを支える仕掛けのディーテルにも気を配る必要がある．初等教育ほどそれは丁寧にデザインされねばならない．國分は前掲書の結論において，楽しむためには訓練が必要と述べてその例に食をあげているが，その際も情報量が少ない食べ物であるファスト・フートはいくら時間をかけても味わう楽しみは得られない，としている(p.396 および注).

本稿の執筆時点である 2023 年 8 月末までに，どれほど学生が saoco lab.の軒下にいたかはわからない．しばらく継続し，その結果を待つこととしたい．まちに暮らす人が風景を体験する力をもち，その人たちが体験の場をうむまちを育てる．この好循環の渦が生起する場所の一つとして saoco lab.が成長していけるよう，まちにいるいま，ここを楽しんでいきたい．

**謝辞**：いつも saoco lab.を気にかけ，声をかけてくれる新栄町の隣人に，心から感謝申し上げる．

## NOTES

注1) ユクスキュルについては中村良夫先生も度々言及しており，それは環境と主体，あるいは空間と身体の双対一元性という考えの論拠として環世界に注目している．例えば中村良夫「風土自治」藤原書店，p.254，2020 など

注2) 國分は環世界の概念を用いて，ハイデガーの退屈論への批判的解読をおこなっているのであって，本論のように主体と環境の関係論に力点があるわけではない．

## REFERENCES

1) 佐々木葉:まちにいる・まちにひらく-郡上八幡 saoco lab.の 120 日，景観・デザイン講演集 No.18, pp.350-358, 2022
2) 佐々木葉:大地の眺めのすすめ，景観・デザイン講演集 No.17, pp.341-344, 2021
3) 佐々木葉:アウラなき時代の風景意欲，景観・デザイン講演集 No.5, pp.240-246, 2009
4) 佐々木葉:風景のクオリアと言葉，景観・デザイン講演集 No.3, pp. 93-97, 2003
5) 西研:哲学は対話する−プラトン，フッサールの〈共通了解をつくる方法〉，筑摩選書，2019
6) 國分功一郎:暇と退屈の倫理学，新潮文庫，2022
7) 中村良夫:風景を愉しむ風景を創る−環境美学への道，NHK 人間講座 2003 テキスト，p.7, 2003
8) ユクスキュル・クリサート:生物からみた世界，日高敏隆・羽田節子訳，岩波文庫，2005